



八坂神社の二本杉やまかじんじや にほんすぎ

指 定 昭和三十六年三月二十二日

所在地 いわき市遠野町入遠野字天王

所有者 八坂神社

入遠野の天王川に沿って進むと、右前方に八坂神社の杉の森が見えてくる。うっそうとした昼でも暗い参道両側の杉並木は、樹齢二〇〇〜三〇〇年以上の大木で、参道は夏でも冷気のただよう荘厳な雰囲気をもたしている。

境内西側の斜面に並んだ大木が二本杉である。南側のものは樹高三・五m、胸高幹回り六・一四m、根周り八・六二m。北側のものは樹高三・五m、胸高幹回り六・二二m、根回り九・一二mの大木である。樹幹は真つ直ぐに伸び、枝は太く四方に広がり、葉も毛櫛のふさのように枝端にたくさんつき良く繁っている。樹冠も楕円状円錐形になっている。樹皮は古木らしく縦に裂け、根元はともに並んで斜面に広がって樹勢は盛んである。

スギの大木は各地にあるが、いずれも損傷している場合が多く、本樹のようにスギ本来の姿を擁しているのは少ない。樹齢一、二〇〇年と伝えられるが、実際は不明である。

スギは日本特産の樹木で、温・暖帯に分布する。

スギ(スギ科)

いわき市内では、メタセコイヤと共に新生代の地層から化石として出土する。日本全国に分布するが、天然林は少ない。葉は小形の鎌状針形で、螺旋状に並んでいる。雌雄同株の植物で、雄花は前年の枝の先端につき、雌花は前年の枝の先に一個ずつつく。天然スギには表日本スギと裏日本スギがあり、これらを基に植林に適する多数の品種が育成されている。和名の「スギ」は「真つ直ぐの木」からきているといわれている。



いわき市入間沢産クビナガリユウと
ノコギリエイの化石

指定 平成三年三月二十二日

所在地 いわき市常磐湯本町向田

(いわき市石炭・化石館内)

所有者 いわき市

中生代・白亜紀

昭和四十三年、いわき市大久町板木沢の玉山層(約八千万年前)から採取された海棲爬虫類の骨化石を手がかりにして、国立科学博物館が二年にわたる大規模調査を行い、「フタバスズキリユウ」とよぶクビナガリユウ化石を発掘した。

昭和五十六年にいわき市教育委員会は、大久町入間沢の玉山層の発掘調査を行い、多量のクビナガリユウの骨格や歯牙のほかに、魚類・軟体動物類・コハクなどの化石を採集した。

魚類化石の中にはノコギリエイの鼻吻のトゲが含まれており、このトゲはこれまでに採集されていたものといくつかの点で違いがあることが分かった。

その特徴は、歯の形では歯冠部が直線的であり、歯根部は粗削りで広がっていること、切縁は前部表面に丸みがあり後部表面が鋭利に平らに切られていること、櫛鱗ヒシヤウリンの接合面が他の種類(属)と違っていることである。これらをもとにこの化石は、エイの仲間(目)のスクレロリンクス科の新種とされ、上野輝彌・長谷川義和両博士により、イスキライザ・イワキエンシスとして発表された。



いわき市上高久産ステゴロフオドン象の下顎骨化石

指定 平成三年三月二十二日

所在地 いわき市常磐湯本町向田

(いわき市石炭・化石館内)

所有者 いわき市

中生代・白亜紀

この化石は、昭和六十年七月いわきニュータウン造成地内から発見された。

化石が発見された地層は、白土層群中山層吉野谷凝灰角礫岩部層で、新生代新第三紀中新世(約一、五〇〇万年前)の浅い海底か河口付近で堆積した地層である。

ステゴロフオドンゾウは、日本国内から産出したゾウの化石のなかで最も古い時代のものであり、絶滅したマストドンというゾウの仲間である。このゾウは、中国・ビルマ・日本などのアジア地域で発見され、国内の発見地は、宮城県・茨城県・富山県といわき市の四ヶ所である。いわき市からは、国内最多の九点の化石が発見されている。指定されたステゴロフオドンゾウ化石には、下顎骨に左右二個ずつの臼歯と、先端部には二本の切歯(牙)があるほぼ完形である。

昭和六十三年にはこの化石を基準にして、臼歯によっていくつかの学名がつけられていた国内産出のステゴロフオドンゾウ臼歯化石の比較研究がなされ、上下、左右、成幼体、雌雄について分類が可能となった。

同時期に生棲していたゾウにはゴムフォテリウムゾウがいるが、これは臼歯が下から上に生え変わる垂直交換型であるのに対してステゴロフオドンゾウは、現生のアフリカゾウ・アジアゾウと同じく、後から前に臼歯を押し出して生え変わる水平交換型である。また、下顎骨にも切歯があることも初めてわかり、切歯が消失することが進化の過程とすれば、この化石は近代化に向かう以前のものとして、ゾウの進化を考えるうえで重要な資料といえる。